

# 演劇を通じてコミュニケーション力

## 人間関係づくりの円滑に 授業で使える

### 日本演劇教育連盟 正嘉昭委員長

授業の導入などに「ドラマケーション」のアクティビティを取り入れる学校が増えている。『ドラマケーション』は、ドラマとコミュニケーションの合成語。日本演劇教育連盟委員長の正嘉昭氏は、演劇の持つ遊びの要素などから、楽しくコミュニケーション力や表現力を高め、人間関係づくりの円滑にすることを目的にアクティビティを提案している。

正氏がミュージカル部長を務める、NPO「パリアフリーアートの会」は、知的に障害がある成人ら15人が月に2回集まり活動している。正氏の指導の下、ドラマケーションのアクティビティが行われる。

舞台の中心に、1人目が立ち、好きなポーズを決める。2人目は1人目の体のどこかにワンタッチして、ポーズをつくり、止まる。3人、4人と続き、「誰かのどこかにワンタッチ」し、メンバー全員が誰かと触れ合った状態で静止している。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

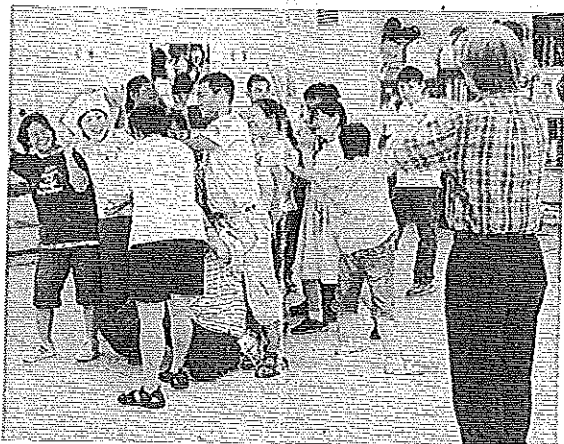
正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。

正氏が「花」は抜けようという声掛けをする。グループの半分が抜け、残ったグループに「花になる」と言うと、舞台ではワンタッチしながら、今度はそれぞれがさまざまな花を表現する。次にグループが抜け「風」になって、花の集団にワンタッチをして加わる。



「それっ」。体育館の舞台上に立つ児童が、掛け声を出して、ボールを投げる動作をする。

## 自己表現苦手な子も心開く

### 東京・瑞穂町立瑞穂第一小わかくさ学級

「それっ」。体育館の舞台上に立つ児童が、掛け声を出して、ボールを投げる動作をする。

「届いたよ」と、館内の一番後ろで、声がボールであるかのように、しっかりと手でキャッチするのは、塚田智



発達障害の特性 支援法など語る 日本LD学会大会

東京学芸大学で10月10日から3日間開かれた日本LD学会大会で、「発達障害を大いに語る」をテーマに、同学会の上野一彦理事長、「いま、

秋・東京都西多摩郡瑞穂町立瑞穂第一小学校教諭。 塚田教諭は、名前を呼ばれた児童が投げた声のボールを、一つ一つ丁寧にキャッチし、声の大きさや向きに合わせて、受け取るしぐさを交わす。

これは、同校のわかくさ学級が学習発表会を控え、演劇の練習前の「コマ」。「一番後ろの席のお客さんにも聞こえる声を出そう」と、塚田教諭が行ったのも、ドラマケーションのアクティビティだ。児童はその後、伸び伸びと、通しげに行っていた。

ドラマケーションは、学校現場では、学習姿勢、参加姿勢をつくるウォーミングアップとしても使われている。

塚田教諭は学級の中には、人と向かい合うのが苦手な子や、自己肯定感が低く表現活動に消極的な子もいる。でも、ドラマケーションが始まる

と、遊びの要素があるため、だんだんと心を開くようになった」と語る。

また、児童と保護者を交えて、

たお楽しみ会などでも、親子が向き合い、手を重ねるなどのアクティビティをしたことで、保護者から「子どもと久しぶりに向かい合うことができた」との声が届いた。

概算要求にも 盛り込まれる

来年度以降、学校で演劇を学ぶ機会が増える。

民主党のマニフェストでは、国際社会の中で、多様な価値観の人々と協力、協働できること、創造性豊かな人材の輩出のため、コミュニケーション教育拠点の充実を掲げた。文科省の来年度の概算要求にも盛り込まれ、特に注目されているのが演劇だ。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

「演劇によって自分以外のものになることで、対人関係が苦手だった子どもも日常でも人との関係を楽しめたり、心を解き放つことができる。ドラマケーションは、先生方が校内研修で活用することもある」と正氏。「だが、成績評価など、子どもが身体表現を嫌いになる指導は避けるべき」と指摘している。

# 特別支援教育

## 相互理解のために

### 交流及び共同学習の実践

〇32〇

これまで、豊かなコミュニケーション活動の構築を目指して、近隣や居住地の小学校の協力を得て、交流活動に積極的に取り組んできた本校は、宮城県立ろう学校小牛田分校として昭和32年に設置された。児童・生徒数の増加に伴い、5年後には県立小牛田ろう学校として二十数年の歴史を刻んできたが、03年に再び分校となり、現在幼稚部9人、小学部7人の全16人が在籍している。

小・中学部に在籍する児童・生徒に対し、その居住地の小・中学校の児童・生徒との学習活動の機会を提供することにより、学校生活の充実および卒業後の社会参加の促進を図るとともに、地域における特別支援教育に対する理解を深めることを目的に「居住地校学習推進事業」を展開している。

同事業の活動形態や内容は①通年型(総合的な学習)の単元学習など②短期集中型(学校行事への準備・参加など)③固定曜日

型(教科・領域の学習を中心とした活動など)④3つに分類された活動など

本校ではこの事業にのっとり、希望する児童に対して居住地校学習を進めている。

本校の交流活動の形態は、学校間交流と居住地校交流の2つ。

学校間交流は年間で延べ15回程度。近隣にある美里町立青生小学校と30年以上にわたる交流活動を行っている。

「総合的な学習」における創作活動を通して「田植え」「稲刈り」「脱穀」「収穫祭」

低学年のうちから、交流で触れ合う機会を積極的に設ける

など一連の体験活動と、学年ごとの計画による活動、そして、中学年以上のクラブ活動交流がある。

居住地校交流(年間で延べ45回を予定)は、平成16年から県の事業として開始された前述の活動である。小学部2年生から6年生までの児童4人が、個々の居住地にある小学校の協力の下に、同年の児童と事前協議に基づいた教科や領域の学習を中心とした交流活動を行っている。1年生3人についても、夏休み明けから相手校との協議の下、交流活動が始まっている。

(野澤克己副校長)

豊かなコミュニケーション目指す